

# エドガー・アラン・ポー

Edgar Allan Poe  
1809-1849



アメリカの詩人、小説家。1827年、18歳のときに詩集を自費出版、33年懸賞小説に入選、35年から雑誌編集に従事、そのかたわら短編をいくつか書き上げる。彼の作品はほとんど幻想と怪奇が中心であり、推理小説に属するものは極めて少ない。『モルグ街の殺人事件』（41）『マリー・ロジェエの怪事件』（42-43発表）『盗まれた手紙』（44発表）『黄金虫』（43発表）『お前が犯人だ』（44発表）の計5編である。この5編の中で、密室、暗号、探偵と助手の形式など、その後の本格ミステリーの基本形式をある程度確立し、「ミステリーの父」と呼ばれるようになった。49年ポーはボルティモアで泥酔し、意識不明のまま40歳の若さで他界した。



# ウィルキー・コリンズ

Wilkie Collins  
1824-1889

イギリスの小説家。処女作の歴史小説『アントニナ』（1850）の世評は芳しくなかった。51年、ディケンズと知り合い、生涯の友情を結ぶことになる。ディケンズが主宰していた雑誌に連載したミステリー小説『白衣の女』（60）は大成功を収めた。サッカーは徹夜で読みふけり、後の首相グラッドストーンは面白さのあまり予定の観劇会を欠席してしまったというエピソードがある。コリンズはこの1作でディケンズと並ぶ流行作家となった。『月長石』（68）は、物語的興味と、論理的推理の融合した最初の本格探偵小説との評価を得た。

# アーサー・モリソン

Arthur Morrison  
1863-1945



イギリスの小説家。1880年代からジャーナリストとして活動していたが、94年『ストランド・マガジン』に私立探偵マーティン・ヒューイット・シリーズの連載を始める。ヒューイットはホームズのライバルとして有名だが、ホームズほど超人的ではなく、華やかさに欠ける。だがごく平凡な人間が調査を積み重ねて事件を解決するというスタイルで、推理小説を現実的なものとした功績は大きい。



# ジャック・フットレル

Jacques Futrelle  
1875-1912

アメリカの小説家。1905年、編集に携わっていた『ボストン・アメリカン』紙に「思考機械」の異名を持つオーガスタス・S・F・X・ヴァン・ドゥーゼン教授を主人公とした短編『十三号独房の問題』を発表。その独創的なアイデア、キャラクター作りの妙、ジャーナリスト特有の速いストーリー展開があいまって好評を博した。12年、タイタニック号に乗り合わせ、夫人を救命ボートに乗せた後、自らは船にとどまり、37歳の生涯を閉じた。

<作家紹介>

## R・オースティン・フリーマン

Richard Austin Freeman  
1862-1943



イギリスの小説家。医師の資格を取るが、健康の問題で激務に耐えられず文筆で身を立てることとなった。1902年クリフォード・アッシュダウン名義で小説を出版。07年には当時人気を博していたホームズ譚に刺激され、フリーマン名義で、科学捜査探偵ジョン・イヴリン・ソーンダイク博士の長編『赤い拇指紋』を刊行し、好評を得た。ソーンダイク博士の捜査方法は、従来の勘に頼る探偵と違い、指紋を採集したり、試験管で採集物を分析したりするなど、科学的、論理的であった。ソーンダイクものの2作目の短編集『歌う白骨』（12）では、犯人が最初から分かっており、その完全犯罪を探偵がどうやって見破り追い詰めていくかという新しい形式「倒叙推理小説」を発表した。

<作家紹介>

## バロネス・オルツイ

Baroness Orczy  
1865-1947



イギリスの女性小説家。ハンガリーのオルツイ男爵家の一人娘として生まれ、称号が女男爵（バロネス）である。1905年に出版された歴史冒険小説『紅はこべ』によって名声を得る。当時大人気だったホームズにあやかり、01年から04年まで『ロイヤル・マガジン』に隅の老人シリーズを連載する。他に『スコットランド・ヤードのレディ・モリー』（10）では、この時期としては珍しい女性警察官を探偵役としている。

<作家紹介>

## G・K・チェスタトン

Gilbert Keith Chesterton  
1874-1936



イギリスの小説家、評論家。ジャーナリストとして『デイリー・ニューズ』紙ほかで執筆するかたわら、評論、エッセイ、詩、伝記も出版している。1911年『ブラウン神父の童心』に始まるブラウン神父シリーズは、一見ぼんやりしているようでいて、誰よりも鋭い直感で真相に到達する神父が人気を集めた。ブラウン神父シリーズ以外にも、スリラー長編『木曜の男』（08）ミステリー短編集『詩人と狂人たち』（29）『ポンド氏の逆説』（36）などがある。イギリスのミステリ作家団体ディテクション・クラブの初代会長も務めた。

<作家紹介>

## アーネスト・ブラマ

Ernest Bramah  
1868-1942



イギリスの小説家。農場経営、地方紙記者、作家の秘書などを経て、中国版アラビアン・ナイトといった内容の『カイ・ルンの合切袋』（1900）を発表。14年探偵小説史上最初の盲目探偵が登場する『マックス・カラドス』を世に送り出した。中でも、機械的トリックが奇抜な短編『ブルックバンド荘の悲劇』が傑作とされている。

# メルヴィル・ デイヴィスン・ポースト



Melville Davisson Post  
1869-1930

**ア**メリカの小説家。刑事弁護士として成功を収めるかたわら、1896年探偵小説史上初の悪徳弁護士が登場する『ランドルフ・メイソンの奇計』を出版。1911年短編『神の使者』より開拓期のアメリカを舞台にしたアブナー伯父シリーズを開始する。このシリーズは絶大な人気を得、セオドア・ルーズヴェルト大統領も愛読していた。



# ・C・ベントリー

Edmund Clerihew  
Bentley  
1875-1956

**イ**ギリスのジャーナリスト、小説家。オックスフォード大学を卒業後、弁護士になったが、1902年から新聞編集員となった。彼の書いたミステリはわずかに長編3冊、短編集1冊であるが、『トレント最後の事件』（13）によって、本格黄金時代の先駆者的存在となった。従来 of 誤謬のない神のごとき名探偵を排し、誤りもおかせば、恋もする、血の通った人間を探偵として創造した。

# アガサ・クリスティ



Agatha Christie  
1890-1976

**イ**ギリスの女性小説家。父はアメリカの実業家、母親はイギリス人で、裕福な家庭に育ったが、学校には行かず、家庭教師や両親から教育を受ける。11歳のときに父親が亡くなり、経済状態は悪化した。第1次大戦が始まったばかりの1914年、イギリス航空隊のアーチボルド・クリスティ大尉心得と結婚、戦中は病院のボランティア看護婦として働き、そこで得た毒薬の知識を生かして、名探偵エルキュール・ポアロが登場する『スタイルズ荘の怪事件』（20）を書き上げた。クリスティの名前を有名にしたのは、長編第6作の『アクロイド殺人事件』（26）である。結末の意外性がフェア



# ・W・クロフツ

Freeman Wills Crofts  
1879-1957

**イ**ギリスの小説家。アイルランドに生まれ育つ。1919年に大病を患い、長い闘病生活の退屈しのぎに書いた小説を出版代理店に送ったところ、出版が決まった。それがアリバイ捜査の醍醐味を描いた処女作『樽』である。犯人が仕掛けた鉄壁のアリバイを徐々に崩していくというプロセスを重視した綿密な構成で独特の分野を確立した。5作目からスコットランド・ヤード犯罪捜査部のジョーゼフ・フレンチ警部を探偵役に起用。勘や博識に頼る天才肌でなく、地道にこつこつと足で歩いて証拠を集め、試行錯誤を繰り返しながら粘り強く犯人のアリバイを崩していくというスタイルを作った。

# A・A・ミルン

Alan Alexander Milne  
1882-1956



イギリスの小説家、童話作家、劇作家、詩人、エッセイスト。1906年から『パンチ』誌のアシスタント・エディターを務める。著作は多岐にわたり、児童文学の名作『クマのプーさん』の作者として有名。推理小説のファンで、初めて原稿料を稼いだのはシャーロック・ホームズのパロディだった。彼の唯一の長編探偵小説『赤い館の秘密』（22）は、巧妙なトリックの仕掛けられた密室殺人を、風来坊のアマチュア探偵アントニー・ギリングムが解決する。



# ロシー・L・セイヤーズ

Dorothy Leigh Sayers  
1893-1957

イギリスの女性小説家。1912年オックスフォード大学に進み、中世文学の最優秀賞を得て卒業。教師、出版社勤務、広告代理店のコピーライターなどを務め、23年長編第1作『誰の死体？』を刊行する。ほとんどの作品で、オックスフォード大学出身の博学の貴族探偵ピーター・ウィムジー卿が活躍する。探偵小説に、謎やトリックだけでなく、心理や性格を導入して、普通の小説に近づけようと試みた大作家として評価されている。

# アントニー・バークリ

Anthony Berkeley  
1893-1971



イギリスの小説家。フランシス・アイルズ、A・B・コックス、A・モンマス・プラッツなどの別名を持つ。軍隊勤務を経て、ユーモア雑誌『パンチ』などに寄稿していた。探偵小説の処女作は1925年『レイトン・コート の謎』で、アマチュア探偵ロジャー・シェリングムの初登場となる。『毒入りチョコレート事件』（29）で、1つの作品に複数の推理を用意したことは、従来の探偵小説に対し、もっともらしい結末はいくつもあるという痛烈な皮肉となっている。アイルズ名義『殺意』（31）では、倒叙形式で、妻を殺そうと計画を立てる夫の心理の過程を綿密に描いている。



# S・S・ヴァン・ダイン

S. S. Van Dine  
1888-1939

アメリカの小説家。純文学や評論を発表するが、原稿は売れず、生活苦から麻薬中毒になり、療養生活中に医者から軽い読み物として探偵小説を読むことを勧められ、探偵小説作家へと転向する。第1作『ベンスン殺人事件』（1926）以降すべての長編で、裕福で博識なアマチュア探偵ファイロ・ヴァンスが活躍する。中でも第3作『グリーン家殺人事件』（28）および童謡殺人と異常な犯罪動機を主題とする第4作『僧正殺人事件』（29）は探偵小説史に残る傑作である。

# ジョン・ ディクソン・カー

**John Dickson Carr**  
1906-1977



アメリカの小説家。別名カーター・ディクソンなど。高校時代からすでに創作に手を染め、1930年パリ警視庁のアンリ・バンコランが活躍する、本格探偵小説『夜歩く』が出版された。この処女長編には、人狼伝説のオカルティズム、不可能犯罪、密室殺人などのカー独自の作風と魅力のすべてが含まれている。その他、カー名義で学者のギデオ・フェル博士、カーター・ディクソン名義でヘンリー・メリヴェール卿（H・M卿）を創造した。35年の『三つの棺』ではフェル博士による密室トリックを分類する密室講義が高く評価された。

# E・S・ガードナー

**Erle Stanley Gardner**  
1889-1970

アメリカの小説家、弁護士。別名A・A・フェアなど。大学は退学するも、法律事務所に就職し、弁護士の資格を得る。弁護士業務のかたわら、多数の筆名を使って探偵小説、ウェスタン小説、ギャング小説などを大量に手掛ける。特に刑事弁護士ペリー・メイスンを登場させた『ピロードの爪』（33）がベストセラーとなり、このシリーズは82冊を数えた。57年から放映されたテレビドラマの人気とあいまって、ガードナーはアメリカ最大のベストセラー作家となる。この間にも、フェア名義でバーサ・クールとドナルド・ラムの凸凹コンビのシリーズも並行して刊行している。

# レックス・スタウト

**Rex Stout**  
1886-1975



アメリカの小説家。職を転々としながら小説を書いていたが売れず、売れる小説を書こうと探偵小説の執筆を思いついた。こうして巨漢の美食家私立探偵ネロ・ウルフが初登場する『毒蛇』（1934）が書かれた。ウルフものの第2作目『腰ぬけ連盟』（35）で一躍人気作家となった。それまでの探偵小説の殻を破る、仕事嫌いで、できれば趣味に没頭したいという独創的な探偵を創造した。助手のアーチャー・グッドウィンなどの登場人物の性格付けも魅力的で、ウルフとアーチャーの会話は絶妙である。

# Eラリー・クイーン

**Ellery Queen**

アメリカの小説家。フレデリック・ダネイ（1905-82）とマンフレッド・ベニングトン・リー（1905-71）の筆名。別名バーナビイ・ロス。29年に「国名」シリーズの最初の作品『ローマ帽の謎』が刊行され、評判となった。アマチュア探偵で探偵小説家のエラリー・クイーンと、その父親でニューヨーク市警の警視リチャード・クイーンが活躍する。32年の『Xの悲劇』から始まる、引退したシェイクスピア俳優ドルリー・レーンが主役となる4部作は、ロス名義で発表されており、当時は別人と思われていたため、作品の優劣が論争となったこともある。作家としての経歴は4期に分けられ、独創的トリックや、犯人の意外性に富んだ傑作は第1期の7年間に集中して書かれた。第4期の作品はかなりの部分が他の作家の筆による

<作家紹介>

## ダシール・ハメット

Dashiell Hammett  
1894-1961



アメリカの小説家。別名ピーター・コリンソン。ピンカートン探偵社に入社するが、病気のため職を辞し、その経験を活かして探偵小説を書くようになる。27年から『血の収穫』を『ブラック・マスク』誌に掲載、大きな反響を巻き起こした。暴力団が支配する荒廃した鉱山町を舞台に、無名の探偵コンチネンタル・オブが活躍するこの作品は、血と暴力の世界を感傷をまじえず記録するハードボイルドの手法が見事に結実した記念碑的名作である。ハメットの名声を決定的にしたのは魅力的な探偵サム・スペードが初登場する『マルタの鷹』（30）である。赤狩りの時代、共産主義者であったために、不遇の晩年を送った。

<作家紹介>

## レイモンド・ チャンドラー

Raymond Chandler  
1888-1959



アメリカの小説家。石油会社の役員、社長まで務めるが、解雇を機に作家になることを決意。1933年『ブラック・マスク』誌に処女短編『脅迫者は射たない』を発表。39年長編第1作『大いなる眠り』を刊行、作家としての地位を確立した。すべての長編で活躍する優しく誇り高い正義の騎士、私立探偵フィリップ・マーロウが初登場する。ハードボイルド特有の1人称形式で同時進行的に事件を追っていくが、その文体は、独特の比喻と洒落た会話など、ハメットの即物的な文体に比べると独特の甘さがあり、マーロウの魅力とあいまって人気を高めた。彼の才能が最後の、そして最高の輝きを放ったのは、長編第6作『長いお別れ』（53）である。

<作家紹介>

## ミッキー・スピレイン

Mickey Spillane  
1918-2006



アメリカの小説家。ハイスクール時代からパルプ・マガジンを耽読、自身も執筆活動始める。1947年デビュー作『裁くのは俺だ』は、腕力と「赤」嫌いが売り物のタフな私立探偵マイク・ハマーを主人公としたハードボイルド・ミステリーで、その強烈なバイオレンスとエロティックな描写は低俗、下品と批評家の酷評を受けるが、読者に圧倒的な支持を受ける。52年までに6冊のハマーものを書き、そのいずれもペーパーバックの大量販売システムによって空前のベストセラーとなり、一躍時代の寵児となった。

<作家紹介>

## ス・マクドナルド

Ross Macdonald  
1915-1983



アメリカの小説家。幼いころに父が失踪したため、母と親戚の間を転々と貧しい少年時代を過ごした。妻のマーガレット・ミラーが推理作家として活躍していたことに刺激を受け、1944年に本名のケネス・ミラー名義で処女作を執筆。彼がハードボイルド作家と認められるのは、マクドナルド名義で発表した49年名探偵リュウ・アーチャーの長編第1作『動く標的』からである。アーチャー・シリーズには、作者の原体験に根差した、「失踪」「失われた父親」がテーマとして取り上げられることが多い。

# エド・マクベイン

Ed McBain  
1926-2005



アメリカの小説家。本名エヴァン・ハンター、別名カート・キャノンなど。いくつかの職業を経て、パルプ・マガジンに執筆を始め、1950年代に多くの筆名で大量の作品を執筆した。出世作のハンター名義『暴力教室』（54）は映画化もされた。マクベイン名義の『警察嫌い』（56）は「87分署」シリーズの第1作である。ニューヨークを思わせる架空の都市で起きる様々な事件と、それを追う刑事たちのダイナミックな捜査活動を描いたこのシリーズは、圧倒的な人気を得て、50年近く続いた。



# ウィリアム・アイリッシュ

William Irish  
1903-1968

アメリカの小説家。別名コーネル・ウールリッチ、ジョージ・ポプリー。1926年ウールリッチ名義で青春小説を出版、30年代半ばからサスペンス小説に転向した。40年、タイトルにblackを冠した「黒のシリーズ」の第1作『黒衣の花嫁』でその存在を強く印象付けた。42年アイリッシュ名義で出版した『幻の女』が、最高傑作となった。大トリック、切迫した時間のサスペンスとスリルを巧みに盛り上げている。ポプリー名義でも『夜は千の目をもつ』（45）などを出版している。54年にはヒッチコックによってウールリッチ名義の『裏窓』が映画化されている。

# パトリシア・ハイスミス

Patricia Highsmith  
1921-1995



アメリカの女性小説家。最初の長編『見知らぬ乗客』（1950）は、交換殺人のアイデアを使ったミステリの古典的な傑作であり、ヒッチコックによって映画化もされ、一躍有名になった。55年に発表した『太陽がいっぱい』も映画化されて大ヒットし、人気を不動のものとした。この作品の主人公トム・リプリーは、不思議な魅力をもつ小悪党で、以降繰り返し登場する人気キャラクターとなった。登場人物の心理描写に定評がある。



# バスチャン・ジャプリゾ

Sébastien Japrisot  
1931-2003

フランスの小説家、脚本家。本名ジャン＝バティスト・ロッシ。まだ学生だった1950年に本名で小説を発表、青年時代にはすでに純文学の作家、翻訳家として知られていた。経済的事情から、推理小説に転向し、62年『寝台車の殺人者』をジャプリゾ名義で発表。同年にミステリ第2作『シンデレラの罠』を発表するや、その特異性で一大センセーションを巻き起こし、世界の注目を浴びる流行作家となる。その後、映画の脚本を書いたり、自ら監督を務めたりしている。

# ジョルジュ・シムノン

**Georges Simenon**  
1903-1989



ベルギー・リエージュの生まれ。16歳で地方新聞の記者となり、18歳で処女小説『めがね橋で』を発表。1922年にパリに出て、様々な筆名を使い分け、大量の通俗小説を書く。30年、「メグレ警視」ものの第1作『怪盗レトン』を発表。シリーズは67年まで続き、世界的な人気を博した。代表作は、『黄色い犬』（31）、『判事への手紙』（47）など。作家のボワロー＝ナルスジャックは、「メグレは犯罪より犯人に興味を持つ...彼は警視というより医者であり、弁護人であり、懺悔聴聞僧だ」と評した。

# エミール・ガボリオ

**Émile Gaboriau**  
1832-1873



フランス・ソージョンの生まれ。エドガー・アラン・ポーの影響の下に、世界最初の長編探偵小説といわれる『ルルージュ事件』（1866）を書き、大成功を収める。69年には代表作『ルコック探偵』を発表、手堅い捜査によって謎を解明する、近代的な探偵像の創始者とされる。

# モーリス・ルブラン

**Maurice Leblanc**  
1864-1941



フランス・ルーアンの生まれ。40歳までに数多くの風俗小説を書き、1905年、友人の編集する絵入り雑誌『ジュ・セ・トゥ』に、「飛び切り面白い冒険小説を」との求めに応じて書いた『アルセーヌ・ルパンの逮捕』が大評判になる。以後、ルパンを主人公とする一連の冒険推理小説により世界中で人気を博す。代表作に、『奇岩城』（09）、『813』（10）など。国民的英雄・ルパンを創造した功績により、レジオンドヌール勲章を受けた。

# ガストン・ルルー

**Gaston Leroux**  
1868-1927



フランス・パリの生まれ。法廷記者、ルポライターの活躍した後、数冊の風俗心理小説を書き、『黄色い部屋の秘密』（1908）や、『黒衣夫人の香り』（09）などで大きな成功を収める。特に、絵入り新聞『イリュストラシオン』に掲載された、探偵役の新聞記者ルールタビーユが活躍する推理小説『黄色い部屋の秘密』は、密室殺人を扱った古典的傑作として、推理小説史上大きな地位を占めている。その他、ミュージカルで有名な『オペラ座の怪人』（10）の著者としても名高い。



# ジョン・バカン

**John Buchan**  
1875-1940



イギリスの政治家、評論家、歴史学者、小説家。弁護士、代議士、カナダ総督などを務め、その忙しい生活のかたわら、伝記、歴史小説、長編冒険小説を発表した。1915年にリチャード・ハネイを主人公とする、『三十九階段』を発表、後にヒッチコックによって映画化されている。このハネイシリーズは、手に汗握る冒険談に国際政治を結びつけ、後のスパイ小説の原型となった。

# イアン・フレミング

**Ian Fleming**  
1908-1964

イギリスの小説家。イギリスのエリート階級に生まれ育ち、第2次大戦では海軍情報部でスパイ活動に当たる。1953年、それまでの体験の実績を生かし、スパイを戯画化したエンターテインメント長編『カジノ・ロワイヤル』を発表した。この作品で、イギリスが世界に誇るスーパー・スパイ、007号ジェームズ・ボンドが誕生した。この作品で、従来の古いスパイ小説を、米ソ冷戦下という時代状況の中に大人の童話として蘇らせた。62年にテレンス・ヤング監督、ショーン・コネリー主演で映画化され、大ヒットとなった。

# ジョン・ル・カレ

**John le Carré**  
1931-



イギリスの小説家。外務省書記官、領事を務めるかたわら、1961年に初老の情報部員ジョージ・スマイリーを主人公とした処女作『死者にかかってきた電話』を発表。63年『寒い国から帰ってきたスパイ』は世界的ベストセラーとなる。リアルな人間洞察によって生命や愛情をも抹殺し尽くす冷戦下の諜報戦の実体を描いた同書は、従来のヒロイックなスパイ小説の対極にある新しいスパイ小説の誕生と絶賛を浴びた。